

2020 年 2 月 2 日（日）「あなたはどこに立つか」

マタイ 27:11-26（その 2）

11 さて、イエスは総督の前に立たれた。すると、総督はイエスに「あなたは、ユダヤ人の王ですか」と尋ねた。イエスは彼に「そのとおりです」と言われた。12 しかし、祭司長、長老たちから訴えがなされたときは、何もお答えにならなかった。13 そのとき、ピラトはイエスに言った。「あんなにいろいろとあなたに不利な証言をしているのに、聞こえないのですか。」14 それでも、イエスは、どんな訴えに対しても一言もお答えにならなかった。それには総督も非常に驚いた。

15 ところで総督は、その祭りには、群衆のために、いつも望みの囚人をひとりだけ赦免してやっていた。16 そのころ、バラバという名の知れた囚人が捕らえられていた。17 それで、彼らが集まったとき、ピラトが言った。「あなたがたは、だれを釈放してほしいのか。バラバか、それともキリストと呼ばれているイエスか。」18 ピラトは、彼らがねたみからイエスを引き渡したことに気づいていたのである。

19 また、ピラトが裁判の席に着いていたとき、彼の妻が彼のもとに人をやって言わせた。「あの正しい人にはかかわり合わないでください。ゆうべ、私は夢で、あの人のことで苦しいめに会いましたから。」

20 しかし、祭司長、長老たちは、バラバのほうを願うよう、そして、イエスを死刑にするよう、群衆を説きつけた。21 しかし、総督は彼らに答えて言った。「あなたがたは、ふたりのうちどちらを釈放してほしいのか。」彼らは言った。「バラバだ。」22 ピラトは彼らに言った。「では、キリストと言われているイエスを私はどのようにしようか。」彼らはいつせいに言った。「十字架につけろ。」23 だが、ピラトは言った。「あの人がどんな悪い事をしたというのか。」しかし、彼らはますます激しく「十字架につけろ」と叫び続けた。24 そこでピラトは、自分では手の下しようがなく、かえって暴動になりそうなのを見て、群衆の目の前で水を取り寄せ、手を洗って、言った。「この人の血について、私には責任がない。自分たちで始末するがよい。」25 すると、民衆はみな答えて言った。「その人の血は、私たちや子どもたちの上にかかってもいい。」26 そこで、ピラトは彼らのためにバラバを釈放し、イエスをむち打ってから、十字架につけるために引き渡した。

【序論】

前回に引き続き、マタイ 27:11-26 を扱います。今日は 19 節以下を中心に見てまいります。この後半部分では、前半には出てこなかった登場人物がいます。第一にピラトの

妻、第二に群衆です。ピラトの妻というのは、聖書中ここにしか出てこない人でありながら、異邦人の女性にして鋭い霊的洞察力を持っております。イスラエルの宗教指導者たちの盲目と対照されている。更に、どっち付かずできた群衆と、判断力のないピラトがそれぞれに出した結論が見られます。各々の立場にあって、異なる態度を示しているのです。これらすべての人々は、イエス・キリストという一人の人によって、その進む道が分かれています。読者にもまた、一つの態度決定が求められているでしょう。

【本論】

本論 1. 真理に立ったピラトの妻

また、ピラトが裁判の席に着いていたとき、彼の妻が彼のもとに人をやって言わせた。
「あの正しい人にはかかわり合わないでください。ゆうべ、私は夢で、あの人のことで苦しいめに会いましたから。」(27:19)

ピラトの妻の証言は重要な意味をもっています。この人について他に情報がありませんが、おそらくローマ人でありながらユダヤ教に関心をもち、ナザレのイエスの裁判の不当性を直感的に感じ取っていたのでしょう。聖書外文書の一つである「ニコデモ福音書」(別名ピラト行伝)にはこの女性についての伝説が記録されており、名をクラウディア・プロクラといい、「神を畏れ、ユダヤ人の慣習を重んずる者」とされているようです(2:1)。そして、彼女はやがてキリスト教徒となり、ギリシャとエチオピアの教会で聖徒と仰がれるようになったと言われます。実際のところはよく分かりませんが、キリスト教に好意的な人が美化され、尾^お鰭^{ひれ}のついた伝説が広まることはよくあったようです。

いずれにせよ、彼女は夢で啓示を受け、その内容を夫に伝えている。神はしばしば夢を通してご自分の御旨を明らかにされます。創世記 41 章ではエジプト王にこれから起きる 7 年の豊作と 7 年の飢饉が予告され、ダニエル書 4 章ではネブカデネザル王にバビロニア帝国の滅亡とともに諸国の栄枯盛衰が示されました。マタイ福音書でも、主イエス誕生のとき父ヨセフに恐れずマリヤを迎え入れるよう夢による啓示があり(1:20)、主イエスを礼拝するために訪れた東方の博士たちにもヘロデ王を避けて帰るようにとの指示がありました(2:12)。このたびのピラトの妻に対する夢による啓示は、今裁判を受けている主イエスの無罪性を示すものでした。彼女がこの夢を見た時間帯は、主イエスがゲッセマネの園で悶えながら祈りをささげていた時であり、神は不思議な形で祈りに応えておられたのです。神は明らかに妻の言葉を通してピラトにご自身の御旨をお知らせになりました。そこには、この裁判において出すべき結論があったのです。ピラ

トは妻の助言を神のことばとして受け留める必要がありました。

本論 2. 群衆の本質

しかし、祭司長、長老たちは、バラバのほうを願うよう、そして、イエスを死刑にするよう、
群衆を説きつけた。(27:20)

ピラトが「バラバか、イエスカ」という二者択一の問いを投げかけたのに対し、ユダヤ教の代表者たちは群衆を扇動してバラバの方を求めさせました。先に、彼らは主イエスを訴えるに当たって「この人はわが国民を惑わし、カイザルに税金を納めることを禁じ、自分**は王**キリストだと言っていることがわかりました」(ルカ 23:2) と言って扇動罪を適用しようとしていましたが、実際に群衆を扇動しているのは彼らであることが分かるでしょう。

ここから目立ち始めるのが「群衆」ですが、ここに居合わせた人々のすべてが主イエスのエルサレム入城のときに棕櫚の枝を道に並べて迎えた人々であったとはい切れません。むしろ、エルサレム入城時に歓呼の声を挙げたのはガリラヤから来た群衆であり、ここではエルサレムにいた群衆がその大半を占めていると考えられます。とはいえ、福音書にたびたび登場する「群衆」というのは無責任な存在であり、群集心理でその場その場の流れに吞まれていく傾向がある。主イエスを王にしようと誰かが言い始めれば、こぞってそうしようと盛り上がり、そのイエスが捕えられ、もはや王となる可能性がなくなったら、祭司長らに抱きこまれて反対側に付く。

なぜこのような態度の豹変が起きるのでしょうか。それは、彼らの内で明確な態度決定がなされていないからです。主イエスを認めるか否かにおいて、彼らの中で依然としてフワフワとした曖昧さがあった。弟子になろうという意思決定がなされていない。そのように迷いながら、何となく皆の行く方に付いて行っておりますと、全体的な声が向かう方向に絶えず傾くことになるでしょう。

私たち日本人は特にその傾向が強く、皆がやっていることを一緒に行なうところに安心感を見出す性質があります。「皆やってるよ」という言葉に弱い。あなたはキリストの弟子なのか、そうでないのか。その場その場で態度を入れ替えて生きてはいないか。キリスト者としてのアイデンティティが不明瞭であると、世の誘惑に流されやすく、真理に立ち続けることができなくなってしまうでしょう。

本論 3. 真理を捨てたピラト

しかし、総督は彼らに答えて言った。「あなたがたは、ふたりのうちどちらを釈放してほし

いのか。」彼らは言った。「バラバだ。」ピラトは彼らに言った。「では、キリストと言われているイエスを私はどのようにしようか。」彼らはいっせいに言った。「十字架につけろ。」だが、ピラトは言った。「あの人がどんな悪い事をしたというのか。」しかし、彼らはますます激しく「十字架につけろ」と叫び続けた。(27:21-23)

「あなたがたは、ふたりのうちどちらを釈放してほしいのか」というピラトの問いもまた、彼自身がどこに立つべきかを決められない意志の弱さを表しています。そして、その意志の弱さに群衆はつけ込む。そもそも、ピラトという人物についてヘロデ・アグリッパ1世は「強情、傍若無人、残忍酷薄」と評しているようで、このようにユダヤ人の言いなりになっていく姿は想像もつきません。しかし、残忍性や傍若無人性といったものは、しばしば真理に立てない人間が反対者の意見（あるいはその存在）を消すための強硬手段であり、弱さの裏返しであることが多い。逆らう者と話し合うことをせず、武力行使によって解決しようとするのは、知性を投げ捨てる行為と言えましょう。

そもそも、ピラトは群衆に「相談」すべきではなかったのです。彼はイエスのうちに罪が認められないのであれば、即その場で無罪宣言をしなければならなかった。そして、直ちに釈放すべきであったところ、彼は殺人者バラバと並べるという挙に出してしまったのです。群衆はあくまでもバラバの釈放を求める。その叫びには根拠がありません。主イエスは法的根拠とはかけ離れたところで処刑されていく。罪名もなければ、有罪判決もないまま、十字架送りとなるのです。

ピラトは彼なりに抵抗を試みました。しかし、「では、キリストと言われているイエスを私はどのようにしようか」「あの人がどんな悪い事をしたというのか」という言葉には何の力もなく、群衆に押され、たじたじになっている様子が窺えます。^{うかが}。ヨハネ福音書では、ピラトは少なくとも3回イエスの無罪性を宣言しています。

- ・ ピラトはイエスに言った。「真理とは何ですか。」彼はこう言ってから、またユダヤ人たちのところに出て行って、彼らに言った。「私は、あの人には罪を認めません。」(ヨハネ18:38)
- ・ ピラトは、もう一度外に出て来て、彼らに言った。「よく聞きなさい。あなたがたのところにあの人を連れ出して来ます。あの人に何の罪も見られないということを、あなたがたに知らせるためです。」(ヨハネ19:4)
- ・ 祭司長たちや役人たちはイエスを見ると、激しく叫んで、「十字架につけろ。十字架につけろ」と言った。ピラトは彼らに言った。「あなたがたがこの人を引き取り、十字架につけなさい。私はこの人には罪を認めません。」(ヨハネ19:6)

ここまで粘ったピラトでしたが、群衆を恐れ、ついに最悪の決断を下してしまいます。

そこでピラトは、自分では手の下しようがなく、かえって暴動になりそうなを見て、群衆の目の前で水を取り寄せ、手を洗って、言った。「この人の血について、私には責任がない。自分たちで始末するがよい。」すると、民衆はみな答えて言った。「その人の血は、私たちや子どもたちの上にかかってもいい。」そこで、ピラトは彼らのためにバラバを釈放し、イエスをむち打ってから、十字架につけるために引き渡した。(27:24-26)

水で手を洗うのは、イスラエル宗教において身の潔白を表明する象徴行為でした(申命 21:6-9、Ⅱサムエル 3:28、詩篇 26:6、73:13)。ピラトはユダヤ人に分かる形で潔白を証明しようとしたのです。「ナザレのイエスの処刑の責任は俺にはない。お前らにある」と。これは責任転嫁でなくて何でしょう。イスカリオテのユダが、主イエスを売ったときに受け取った銀貨 30 枚を返しに行った際にも、祭司長らはそれを突き返し、「**私たちの知ったことか。自分で始末することだ**」と逃げました(27:4)。そして、このローマ法の下での裁判そのものが、ユダヤ教最高議会が罪を負わないようにローマ人に押し付けた責任転嫁だったのです。その責任をまたピラトが投げ返す。このように、主イエスの血の責任を誰も取りたがらない事態が生じている。人間の罪が最も顕著に表れるのは、自らの責任を取らず開き直るところでしょう。アダムも、神に逆らった責任をエバに押し付け、エバは蛇に押し付けました(創世記 3:12-13)。この、責任を押し付け合う人間の姿を見ると、現代においても同じ闇が人類を支配している様子と重なってくるではありませんか。その性質は私たちの内にも生まれつき備わっている。子どもは決して自分が悪いとは言わず、相手の悪いところだけを訴えるでしょう。子どもだけではありません。大人もまた、より陰湿な形で同じことをやっているのです。

聖なる神(イエス)の前で、人間が罪の押し付け合いをしているのが、この十字架裁判の本質です。そして、主イエスはこの罪人たちのために苦しみ、彼らの罪を負おうとしておられる。十字架に架けられる前に鞭で打たれたとあります。ローマの鞭打ちは、それ自体で死ぬ人が多かったと言われるほど過酷なもので、棒の先に結び付けられた革には石・金属・動物の骨などが埋め込まれていたそうです。あまりの酷さゆえに、ここでは詳しく描かれておりません。

【結論】

今日は主イエスに対する態度を決定しないままに責任の押し付け合いをする「偽りの裁判」の様子を見ました。ピラトは真理を垣間見ながら、真理に立つことができなかった。祭司長たちは、イエスの内にこそ真理があることを知っていながら、それを投げ捨てました。群衆はよく分からないままに祭司長たちの意見に流されて叫びました。今、

私たち読者にも一つの態度決定が求められています。私たちは真理に立っているか。キリストの弟子であるか。主の御前に自らを省みたいと思うのです。

【祈り】

光なる神よ。あなたは正義を愛し、正義を求めておられます。しかし、私たち人間は生まれながらに不義に身を染めてまいりました。ピラトによる主イエスの十字架裁判は、人間世界の縮図であり、人間の性質そのものを明らかにしています。主よ、私たちを光の内に立たせてください。そして、私たちを光とし、光の業を行なわせてください。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、
光そのものにして、闇の世を照らし給う、父なる神の愛。
責任転嫁の渦の中、ただ一人、他者の罪の責任を自ら背負い給うた、主イエス・キリストの恵み。
光の内に立たせ、主イエスの側に着く者とさせ給う、聖霊の親しき交わりが、
我ら一同と共に、とこしえにあらんことを。